

## 日本流を押しつけるのはおかしい

——柔道が世界に広がって、日本で考える柔道と、世界で普及しているJUDOとの間にギャップが生じているように思えますが。

山下 そう考える日本人は、矛盾していると思います。日本は世界で一番いろいろな国から物・技術・文化などを受け入れて、自分たちに都合よくアレンジしてきた。例えば、アメリカのメジャーリーグから日本のプロ野球へ来た選手が「日本の野球はベースボールとは違う」と言ったことがありましたよね。キリスト教の祭日であるクリスマスも、日本のようなかたちで受け入れていることは、外国から見たら理解できないかもしれない。ラーメンやカレーも日本のほうがうまくて、いろいろな種類がある。

それに対して、日本の柔道が外国で受け入



## 第485回 私の生き方

# 同級生がくれた表彰状

## ——柔道とともに生きる

聞き手  
本誌 常川幹也

これら、その国の格闘技と混ざり合って、その人たちの風土になじんだ柔道ができるのは、当たり前だと思うんですよ。野菜だって、その土地の気候と土と水で変わっていくわけですね。それを一番上手にやっている日本人が、約二百の国と地域に普及している柔

道について、日本流を押しつけるのはおかしいのではないのでしょうか。

もう一つ言うと、日本人はよそから受け入れることは熱心で素晴らしいけれど、自分たちのものを世界に発信していくのはうまくないでしょう。日本に対する興味・関心を

通じて、日本に対する信頼を得るための活動は、まだまだ不十分だと思いますよ。

ただ、ここで見失ってはいけないのは、これを変えたら、名前は柔道でも柔道ではないという一線——不易流行の不易の部分があります。やはり時代が変わっても変えてはいけないものがある。そこはしっかり守っていかなければならない。柔道では、相手に対して敬意を持ちます。戦う相手は敵ではない。柔道というのは、人づくり、人間教育なんです。それを失えば、かたちは柔道であっても、それはもう魂が抜けたもので、柔道とは呼べないと思います。

## 私の生き方

ちよつと前まで「効果」というポイントがありました。「効果」をいくつ取っても、その上の「有効」にはならない。「有効」をいくつ取っても「技あり」にならない。でも、「技あり」は二つ取ると「一本」になるんですね。他の格闘技、例え



東海大学体育学部長

## 山下 泰裕

やました やすひろ：1957年熊本県生まれ。柔道8段。東海大学卒、同大学大学院体育研究科修了。東海大学体育学部教授。2009年より現職。全日本選手権優勝（9連勝）、世界選手権+95kg優勝（3回連続）、世界選手権無差別級優勝、ロスオリンピック無差別級優勝など、203連勝にて現役選手を引退。

のは、完璧に相手の息の根を止めることなんです。それが原点である以上は、やはり「一本」をめざすことが柔道の本質ではないかと思えます。それを貫いていくことが柔道の魅力にもなってくるし、柔道が持つアートのな



要素でもあると思う。ポイントを取って勝てばいいのだというのは、柔道の本質から外れています。

——昭和三十一年、熊本県矢部町のお生まれですね。

山下 町村合併で名前が変わって、山都町になっています。

九州の地図をイメージしてください。その地図のちょうど真ん中あたり、阿蘇山のちょっと下のほうを指さすと、私が生まれたところなんです。ほんの二、三十キロ行けば、宮崎県との県境です。

——ご実家はどんなお仕事をされていたのですか。

山下 食料品の仲卸ですね。生鮮あるいは乾物食品、それから日用品などを仕入れて、それを山間部のお店に卸していました。

——山下さんを柔道の道に導いたのは、ご両親やお祖父さんの影響が大きかったですか。

山下 祖父にとつて私は初孫で、かわいくてかわいくて仕方がない、という感じだったんです。そのことに加えて、現役時代からずっと丈夫な私のこの体も影響していると思います。

柔道を始めたのは、小学校四年生になったのと同時ぐらいなんです。実は祖父さんは、私が柔道をやることではなくて、その道場に行くことに反対でした。というのは、うちの祖父さんと、その道場の先生は、あまり関係がよくなかったんです。

祖父さんと仲の悪い道場へ行くことになるのは、理由がありました。直接のきっかけは、クラスメートの登校拒否です。私は幼稚園時代からいっぱい問題を起こしていました。小学校に入っても、わりとあつげらんとしていて、自分が悪さをしているって意識があんまりないんですね。でも、体が人一倍大きくて、非常にエネルギーがあつて、走っても一番速かったんですよ。スポーツが得意なだけではなくて、負けず嫌いでもありました。なんでも一番でなければ気が済まない性格だったもんですから、エネルギーをもてあました部分もあるし、普通の同級生の活動の幅からはみ出ることもしばしばでした。それで、気に食わないことがあると「なに言うんだ」って感じで、周りから見たら怖かったです。しょうね。

——ガキ大将ですね。

山下 あんまり私が悪かったもんですから、近所の方から両親に「柔道でもやらしたらいいんじゃないの」と言われたみたいです。

### 暴れん坊が世界の頂点をめざす

——柔道をやり始めて……。

山下 柔道選手としての伸び幅は他の人よりもあつて、上達のペースも速かったと思います。ただ、年月をかけなければうまくならないこともありますし、やり始めて一カ月、二カ月の人間が二年も三年もやっている人に勝つたらおかしいでしょう。四年生で始めて、五年生のときに県の小学生の柔道大会で二位になり、六年生では優勝しました。

そういうことから始めた柔道ですが、小学校時代の私の行いはあまり良くならなかった。両親の期待に応えることはできなかったと思います。通知表の所見欄では、一回もほめられたことはなかった。ただ、柔道だけは、激しさに惹かれて、夢中になってのめり込んでいくんですよ。

小学校五年で県で二番、六年で優勝して、素晴らしい指導者の目にとまるんです。熊本市立藤園中学校の白石礼介先生から誘われて、中学から親元を離れて、熊本市の藤園中に進みました。祖父が市内に住んでいたのでも、そこから学校へ通いました。藤園中の柔道部は、公式戦九年間無敗の記録を持っているなど、ものすごく強かったですよ。私が中学一年生のときにあつた第一回の全国中学校柔道大会でも藤園中が優勝しました。私もこの大会に二年生、三年生のとき出ましたが、藤園中は三連覇しています。

私は日本一の柔道部に入ったわけですが、白石先生の考えは、勝ち負けだけではない「人づくり、人間教育」の柔道なんです。白石先生との出会いは、私の柔道人生あるいは現在の人生の出発点かなという気がする。というのは、今、私がそういう活動をさまざまところで展開しているんですよ。

——それはNPO法人での活動ですか。

山下 二〇〇六年に「柔道教育ソリダリティー」というNPO法人を立ち上げて、昨年認定になりました。それだけでなく、神奈川県

ロス五輪でエジプトのラシシュワン選手を破り、金メダルを獲得（UPI＝共同提供）



書かれた表彰状です。  
 どうもね、私に対する期待が大きいせい  
 か、実物よりもよく見られるんですよ。能力  
 がないとは思いませんが、人並みだと思っ  
 ています。でも、それ以上の能力があるとも見  
 られているから、人物も実物より良く見られ  
 る。私が「子供の頃は悪かった」と言っ  
 ても、小さい話が大きくなっているだけではな  
 いかと、みんな思っているんですよ（笑）。

こうい活動、自分の影響力の及ぶ範囲  
 の中でやってきているのですが、その出発点  
 には、暴れん坊で周りに迷惑ばかりかけてい  
 た私が、白石礼介という素晴らしい恩師と出  
 会ったことがあります。そして、日本の、世  
 界の頂点をめざすことを通して自分自身も成  
 長していききました。柔道選手として勝つこと  
 も大事だけど、もっと大事なものは、そこで学  
 んだもの、得たものを人生に生かして、人生  
 の勝者になることです。そう教えられたこ  
 とが、今の私の人生の基盤になっています。

東体育協会の会長として、あるいは東海大学  
 体育学部長として、柔道あるいは武道、いろ  
 いろなスポーツクラブ、運動部、一般体育の  
 授業でも、スポーツはあくまでも教育の一環  
 だと教えています。スポーツにおいて一番大  
 事にしなければならないのは、勝ち負けや技  
 がうまくなるだけではなく、フェアプレイの  
 精神です。仲間と力を合わせて、相手を思い  
 やり、ルールを守ることを大事にしていく。  
 全日本柔道連盟でも、「柔道ルネッサンス」  
 という活動の中で、この考えを実践していま  
 す。

——子供の頃「世界選手権、オリンピックに優勝  
 して、メインボールに日の丸を掲げ、君が代を歌  
 う」という作文を書かれたとか。  
 山下 それは、中学二年生のときの「将来の  
 夢」という作文です。これは夢です。  
 二十六年前のロス・オリンピックで優勝し  
 て、矢部町に帰ったときに、小学校時代の同  
 級生が集まって祝賀会を開いてくれました。  
 そのときにもらった記念品の表彰状には、こ  
 う書かれてました。  
 「表彰状 山下泰裕殿 あなたは、小学校  
 時代、その比類ない大きな体を持て余し、け  
 んかをして相手を泣かせたり、教室で暴れた  
 りして、われわれ同級生に多大な迷惑をかけ  
 ました。しかし、今回のロサンゼルス・オリ  
 ンピックにおかれましては、われわれ同級生  
 並びに国民の期待を裏切るまいと、不慮の怪  
 我にもかかわらず、持ち前の闘魂を発揮さ  
 れ、みごと金メダルに輝かれました。このこ  
 とは、あなたの小学校時代の数々の悪行を清  
 算して余りあるだけでなく、われわれ同級生  
 の誇りとするところであります」と。そして、  
 最後に「永遠の友情を約束するものです」と

## 目標が「日本一」から「世界一」へ

——柔道は「礼」で始まりますね。

山下 戦う相手は敵じゃない。相手がいるか  
 ら自分を磨き高めることができるんです。で  
 も、戦つてるときは勝負ですからね、そこは  
 勝ち負けにこだわります。

私が現役の頃は「試合のときのおまえの目  
 は、獲物を射止める獣の目つきだ」と言われ  
 るくらいだったらしいんですよ。やはり日の  
 丸をつけて世界で戦つていくときは、「もし  
 かしら、この戦いのあと日本に帰ってこら  
 れないかもしれない」という決意で死に物狂  
 いでがんばりました。そういう覚悟で礼をし  
 て始めて、終わった瞬間には、戦った相手に  
 対して礼を尽くす。

やはり日本人というのは、そういうものを  
 昔から大事にしたんですね。サムライは、お  
 互いの名誉（義）、藩、殿様などの威信をか  
 けて戦いましたが、その結果、命を落とした  
 相手に対する礼は尽くしている。第二次世界  
 大戦でも、そういう話を聞くことがあります

す。お互いに立場が違えば、全身全霊をかけて戦うけれども、戦った相手を尊敬する。スポーツ、武道、柔道においては、相手がいるから自分を磨き高めることができるんだということですね。これが大事ですね。

——もう一人の恩師について。

山下 高校二年生のときに、熊本から神奈川へ出てきました。それで、もう一人の恩師、佐藤宣践先生（東海大学特任教授）と出会い、先生の家に下宿させてもらいました。隣には柔道部の合宿所があったのですが、私だけ先生の家に。佐藤先生のもとで、私の目標が「日本一」から「世界一」に変わるんです。

佐藤先生と出会っていろいろなことを学びましたが、一番大きいのは先生の「生きる姿勢」から得たものだと思います。そして、先生はものすごく勉強熱心でした。その姿を見て、「勉強というものは、大学生までで終わりではない。人生を通して勉強していくこと、成長し続けていくことが大切なんだ」ということを感じました。それから、佐藤先生は非常に率直な方で、誰の話でも良いと思うことに対しては貪欲に耳を傾けられる。そして、

ですね。

山下 いろいろな機会が良い議論がされますね。これからに向けてのまとめが出てきたとき、中にはそれで一つ終わったと思う人がいます。私は全く正反対で、良い案が出てきたら、それを現実にも動かしていくための自分の役割は何なのか、スタートさせるためには何から手を打っていく必要があるのかを考える思考回路がフル活動します。ですから、その目的に対して私のできることがほとんどなかったり、何かを変えることができないと思ったりときは、自分の気持ちはすつと離れます。そのときにもう一つ大事なことは、私が燃えているだけでは話にならないですね。同じような燃える心と高い志を持った仲間と目標に向かっていくことができるように、他のメンバーの心に火をつけることが、私の役割なのかなと思っています。

まず、自らが常に勉強し続け、人生を通して人間的に成長していく。次に、良いと思っただものには誰の話であろうと素直に耳を傾けて行動に移していく。そして、たくさん仲間を得て力を合わせて目的を達成させる。こ

行動に移せるものは、直ちに実行する。そのことも、先生の姿から学びました。

私が現役を退いたとき、佐藤先生は「泰裕、自分で一生懸命がんばることも大事だが、何かを成し得るには個人の力だけではダメで、総合力、組織力が必要なんだよ」という話をされました。何かを成そうと思ったら、どれだけ多くの人の力を結集できるか。志を同じくする人たちと力を合わせていかないと、自分一人だけががんばっても大きなことはできないですね。

今の自分自身を見て、これらのことは、十分ではないけれど、確実に私の血や肉になっています。今、教育者として道を歩んでいますので、豊富な知識は必要ですし、指導法も重要かもしれません。しかし、それ以上に大事なのは、指導者の情熱や人間性。ほんとうに子どもたちを育てていこうと思ったら、学生たちを育てる前に、自分自身を磨かなければならない。自分自身の成長なくして、子どもたちの持っている可能性を伸ばすことはできないと思います。

——そして、自らが行動に移せるかどうかが重要

それが私の今の生き方の柱になっているような気がします。いつか私も、自分自身の生きざまを若い人たちに伝えられる人間になりたいと思っています。

### 「人生いかに生きるべきか」

——柔道を通じて松前先生と出会ったのですね。

山下 東海大学の創設者、松前重義先生は柔道が大好きで、東海大学でもスポーツを奨励されました。ご自身も高校までは熱心に柔道をやられていたんですね。大学以降は科学技術者の道に進まれて、あまり柔道はできなかつた。しかし、大学の研究でも柔道で培った体力、精神力という土台があったからがんばることができた。そして、柔道を通して仲間と力を合わせたり、信じた道を愚直に突き進むことを学んでこられた。

松前先生は、私の祖父と同年なんです。しかも、同じ熊本出身。私を大変気に入っていたら、高校二年のとき私をスカウトしたのは松前先生なんです。そして、いろいろな機会、経験を与えてくださいました。

出発点には、暴れん坊だった私が、素晴らしい恩師と出会ったことがあります。



で、なぜ嘉納先生が柔道を興したのか、なぜ柔道と名付けたのか、なぜ柔道を教えるところを「道」を講ずる館——「講道館」と名付けたのか、先生が人生を通してめざしたものは何なのか、を学びました。

嘉納先生の教えは、白石先生にも、佐藤先生にも、松前先生の生き方にも影響を及ぼしています。当然、私にも影響を及ぼしています。それを学んでいく中で、「(当時の)柔道界は、これでいいのだろうか。勝ち負けだけにこだわって、創始者がめざした人間教育の視点が欠けているのではないか」ということを考えました。勝ち負けで終わってはいけな

い。美しい技も大事かもしれないが、もっと大事なものは「道」であり「心」です。

そして、創始者がめざしたのは、柔道を通して体得したものを人生に生かすこと、それを通して世の中の発展に貢献していくことです。いろいろな人と協力しながら、ともに栄えていくことに至って初めて、嘉納先生がめざした柔道にたどり着けるのではないか。人生を通して、嘉納先生の柔道を実践していく

ような気がするんですよ。それで、人生を五回か六回生きたいんです。一回目が選手、二回目が指導者、今、三回目かな、と思っています。

今は、現場の指導者からも離れた「柔道を通した人づくり、人間教育」ですね。そして、柔道を通して世界の人たちにもっと日本に対する興味、関心を持ってもらう。日本は島国で、資源もないから、世界に信頼され、日本を身近に感じてもらうことは大事だと思います。

日本でさまざまなスポーツを奨励されたのは、嘉納先生なんです。東京高等師範学校(筑波大学の前身)の校長を二十数年間務められて、教員をめざしている人たちにスポーツを奨励しました。スポーツの教育的な価値を、非常に高く評価しておられた。今、私の活動範囲は柔道だけでなくスポーツ界、教育界に及んできています。ですから、今は三つ目か四つ目の人生かなと思うわけです。

多分、私は早熟だと思います。だから、気持ちは若いけど、他の人より早く早く歳をとっていると感じていきますので、最期のイメージは

そんな松前先生が、晩年、私にこんなことを言われたんです。「山下君、何で僕がこうやってね、君を応援しているかわかるか。試合で勝ってほしいこともあった。しかし、それだけじゃないぞ。日本で生まれ育った柔道を通して、君には世界の若人と友好親善を深めてもらいたかったんだ。スポーツを通して、世界平和に貢献できる人間になってほしいんだ。だから、僕はこうやって君を応援してきたんだ」と。何度かそんな話をされました。

亡くなられた後にいろいろな人に聞きますと、松前先生は私をほんとうに自分の孫のように思われていたみたいです。そういう期待があったんでしょうね。先生との出会いを通して「人生いかに生きるべきか」ということを考えるようになりました。自分の人生で何を大事にして、どう生きていきたいのか。自己実現しながら、社会のために役に立ちたいのかということは、自分の生きる基準ですよ。ね。明治の人たちは、それぞれの考え方を持っていておられたと思うんですよ。でも、われわれの世代はほとんど考えてこなかった。そう

いうことを若いうちに考えるようになったことは、非常に大きいと思います。

個人的には、「人生いかに生きるべきか」ということを中学・高校時代から少しずつ考えていくべきだと思います。そして、教育に携わる人たちは、ただ教科を教えるだけではダメで、英語・国語・数学・理科・体育という切り口から、自分の人生を語ったり、人生を教えていく。人が人間として成長していくために、そういう姿勢を持つことが大事なんです。

先ほどの中学時代の作文は「オリンピックでメインボールに日の丸を……」では終わってないですよ。「現役を引退した後は、柔道の素晴らしさを世界の人々に広げられるような仕事をしたい」と書いていました。それは、今やっつてることなんですよ。

### 創始者の柔道を実践していく

——柔道は「柔の道」と書きます。

山下 柔道の創始者は、嘉納治五郎先生です。東海大学の体育学部の武道学科に進ん



できてるんですよ。いくつまで生きられるのかわからないけれど、私がこの世での役割を終えてあの世に行くときに、柔道創始者の嘉納先生と、私を孫のようにかわいがってくれた東海大学創設者の松前先生のお二人に迎えてきてもらう。嘉納先生から「君が山下か。よく柔の道をきわめたな」、松前先生からは「よう僕の期待にこたえてくれた。ありがとう、ご苦労さん」と、お声をかけていただきたい。できれば、下に沈むのではなくて、上に登りたいというのが、私の人生最後の夢なんですよ（笑）。

### 柔道の創始国として

——柔道用語は、日本語であることが大事なのではないですか。

山下 柔道で使ってる言葉はすべて日本語です。日本語でやってるから、日本にとっての価値が高いんですよ。

もう四、五年前の話ですが、私の友人がサッカーの日本代表に同行してチュニジア、ルーマニアと回ってきました。当時チュニジ

アに三人しかいなかった日本語通訳の一人といろいろ話してわかったのは、彼が日本語を学ぼうと決心したきっかけが柔道だったということです。

柔道をやっている、「礼」「始め」「技あり」「待て」「一本」「それまで」という柔道用語の意味は、外国の人にはわからないですよ。でも、それらを使っているうちに柔道だけでなく、日本語、日本文化、日本という国に対して興味を持つてくれた。そういう人が非常に多いわけです。その代表的な人物は、ロシアのプーチン首相です。

私は、柔道用語が日本語ではなく英語になったら、日本に対する柔道の貢献度は半減するような気がしています。だから、これを日本は柔道の創始国として体を張ってでも守り抜かなければいけないと思うんですよ。

それから、「一本」を狙うのが日本の柔道で、外国人はポイントばかり狙っている、という認識は半分以上誤解です。世界チャンピオンあるいはオリンピックチャンピオンになる選手は、日本人も外国人もみんな素晴らしい技を持つてます。日本の試合よりも外国の

試合のほうが、「一本」で決まる率ははるかに高いんです。ただ、外国の選手のほうが、日本の選手よりも勝負にこだわるので、日本に見た場合の潔さがない部分はあるかもしれない。日本でそんな試合したら、「そこまでして勝ちたいのか」って言われてしまうような部分も、人によってはあるかもしれせん。

### 一歩前に出て欲しい

——大きな目標をめざすときのアドバイスをいただけますか。

山下 最終的にめざすものが何なのかは、非常に大事です。そういう場面で感じるのは、企業でもスポーツ界でも教育界でも、どうしても同じような考え方、同じようなところで生きてきた人が集まりやすいことですね。その人たちがみんな「そうだ」と言ったら、一般の人たちもそうなのかなと思ってしまう。こういうのは非常に怖いと思うんですよ。同じ目標をめざすにしても、違うキャリアを持つていたり、さまざまな考え方を持つ人が集

まったときに、ほんとうに良い仕事ができると思います。

私はずっと柔道をやってきた人間で、同じ道を一直線に歩いてきました。学部長として人を採用する立場になって、さまざまな経験を持った人のほうが良いと思うようになりました。というのは、何か大きな仕事をやるうとしたときに、一人でやるよりも多くの人が、一つの組織よりもいくつかの組織で協力したほうがはるかに成果は上がりますからね。ただ、そうしようとしても、いろいろなところに壁があるような気がします。目先ではなくもっと高いところをめざすならば、組織の壁を乗り越えてやっていくべきです。

今、官僚が叩かれています。私は素晴らしい人もたくさん知っています。もしかすると、課のことだけ考えて局のことを考えない、局のことだけ考えて省のことを考えない、省のことだけ考えて国のことを考えない、国のことだけ考えて世界のことを考えない、ところがあってもいいかもしれません。

そういうふうになると、われわれは目先のことではなくて、もっと先の、もっと大き

いつか私も、自分自身の生きざまを  
若い人たちに伝えられる人間になりたい。



なことを大事にしていけないといけないのだと思います。それができないから、紛争も収まらないし、地球環境問題も解決できない。これから何百年先の未来に、人類が生きていけるのかということを考えたときには、ライバルだと思っている人や組織は、実は一番信頼できる仲間であるという視点を、われわれは持たなければならぬのではないのでしょうか。

それから、自分自身が変わっていかねばならないし、組織も変わっていかねばならない。世の中が良い方向に変わっていくことが大事だと思うんですよ。それは柔道界にしても、スポーツ界にしても、教育界にしても、国にしても同じです。その目標に対して自分ができることは何なのか。実現するために、いかに行動していくかが大事です。そして、自らが正しいと判断した目標に向かって、まず一步を踏み出し、リスクをとる勇氣が必要なんです。それでも行動に移れない人は、結局やりたくないのでしょうかね。

東海大学の体育学部長として、仲間の先生や若い先生に言っていることは、野球に喩え

て「お願いだから、打球を定位置で取らないでくれ。エラーしないように、一歩下がって取ることはやめてくれ。一歩あるいは二歩、できれば三歩前に出て取ろう。前に出れば取り逃がすかもしれない。しかし、その姿勢で取り組めば、より難しいボールに対しても対応できるようになるだろう。半年あるいは一年後に、われわれは必ず成長できるはずだ」と。リスクばかりを考えたり、メリットとデメリットを秤にかけるのではなく、生きる姿勢として、一歩前に出て欲しいんですよ。

みんな良いところもあれば、足りないところもある。私なんかは穴だらけです。これはなかなかできないのですが、相手の悪いところを見るのではなく、良いところを認め合っていきたい。実物以上に評価されてきた私だから、そう言える余裕があるのかもしれないが、認められた人が認められる一番の方法は、まず相手を認めることだと思います。世の中に認められていないと思っている人は多い。でも、お互い良さを認め合う、そんな社会になればいいですね。

——ありがとうございます。

